

風姿花伝第三、 問答条々 二 能の序破急

問、能に序破急をば、何と  
か定べきや。

答。これ易き定めなり。一

切の事に序破急あれば、申  
楽もこれ同じ。能の風情を  
以て定むべし。先脇の申楽

〔口訳〕 能に於て序・破・急を如何やうな風  
に定めたら良いでせうか。

答。これは容易に定められるもので  
ある。即ち序・破・急といふものは、  
一切の物事にあるものであるから、猿  
楽の序・破・急も、一切の事物の序・  
破・急と何等変るものではない。猿楽  
に於ては、能の風情（曲目の風趣）を  
以て、序破急を定めるが良い。先づ脇

には、いかにも、本説正し  
き事の、閑雅なるが、さの  
みに細かになく、音曲も、  
舞も、正しく直なる懸かり  
に為べし。第一、祝言なる  
べし。いかに善き脇の申樂  
なりとも、祝言關けては叶

能の申樂に於ては、如何にも正しい本  
説に取材した曲で、全体の情趣が閑雅  
なもの、しかもさう手の込んだもので  
なく、音曲に於ても舞に於ても、正し  
くスカリとして、素直で堂々とした風  
趣のものを選んで演ずべきである。殊  
に祝言即ち「めでたい曲」であること  
が第一条件である。どんなに良い脇能  
であつても、祝言といふことが欠けて  
は全く駄目である。たとひ曲柄は少々  
落ちて、めでたい曲でさへあれば脇  
能として差支はない。これ、脇能は、  
一日の演能の序であるからである。二

ふべからず。仮令、能は少  
し次なりとも、祝言ならば  
苦しかるまじ。これ序なる  
が故也。二番三番になりて  
は、得たる風体の善き能を  
すべし。殊更挙げ句急なれ  
ば揉み寄せて、手数を入て

番目・三番目になつては、（破の段に  
入るから）自分の得意とする曲で、曲  
柄も良い能をやるが良い。殊に、最後  
の曲は、所謂急の段なのであるから、  
勢よく揉みに揉んで十分に手数を入れ  
細かくやるが良い。又第二日目の脇能  
は、前日の脇能とは変つた風体の曲を  
やるべきである。又人を泣かせるやう  
な人情味たつぷりの曲をば、第二日目  
の演能の中程に、十分に時機を考へて、  
最も効果的な時に演ずるやうにせよ。

すべし。又、後日ごじつの脇の申  
楽には、昨日きのふの脇に異かはれ  
る風体をすべし。泣申なきさる楽を  
ば、後日ごじつなんどの中程ほどに、  
よき時分じぶんを考かんがへて為すべし。

---

〔評〕

此の段は、世阿弥後年の述作花鏡の中に、「序破急の事」として一条

を設けて説いて居る所を参照して見ると興味が深い。

花鏡に於ては、序しについては「序は初なれば」ともいひ、「序と申すはをのづからの姿」とも言つて居る。そして「直ぐなる本説、さのみ細かになく、祝言なるが、正しくくだりたる懸かへりなるべし。態わざは舞歌ばかりなるべし」とその内容を規定してゐる。破やについては、「破は又、それ（序）を和して注する釈の義なり」とも「破と申すは、序を破りて、細こまやけて、色々を尽す姿なり」ともいつて、破やといふことばに対する註解を加へてゐる。又急いそについては、「急と申すは拳句の義なり、その日の

名残なれば、限りの風なり」とも、「急と申すは、その破を尽す所の名残の一体なり。さるほどに、急は揉み寄せて、乱舞はたらき目をおどろかす気色<sup>けしき</sup>なり」とものべて、急の性質を説いてゐる。我々はこの世阿弥の言を以て、花伝書の此の段を解釈すべきであらう。そして、花伝書が、花鏡に到つて、如何に精細になつたかを考へ、それと共に、時代人の能楽鑑賞力の進みと、それに応じようとした猿樂者の苦心を考へると面白いと思ふ。